
海 炭酸 転職

藤 緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海 炭酸 転職

【Nコード】

N0979Z

【作者名】

藤緒

【あらすじ】

猛暑の夏、家でくつろぐOLのもとに、コンビニ袋片手の大学生が訪れた。

冷房が壊れたらしいです。迷惑だから直してこい。

（前書き）

このお話は、3つの単語からなる三題噺です。

先程から雑音を流すだけとなっているテレビには、猛暑により大繁盛している海の家が映されている。どちらかと言えばアウトドア派だと自分では思っていたが、このうだる様な暑さに加え、迷子が出没すること必須な人混みには間違っても参加したくない。

やはり、自分の城が一番である。

社会人となってから若干引き籠もりがちなのは、どう足掻いても否定できないな、とアイスを舐めつつソファでだらだらしていれば、呼び鈴が鳴った。また奴が来たんだろうか。

「：貴重な休日、どのようなご用件でしょうか」

「知ってんだろ。空調設備が壊れましたので、避暑におじゃましました」

「避暑地には大都市から離れた場所をおすすめします」

「なあ、この汗見えないの？中入れてくれよ」

さすがに玄関での長話は避けたいので、渋々彼を迎え入れた。

今私の目の前で、堂々とソファを占領しているこの男は、一言で言えば幼馴染である。

特別したいこともなく勉強も嫌いだっただため、高校卒業と同時に就職した私と違い、来年卒業予定の大学生なのだ。昨日から冷房が故障しているらしく、我が家に居座っている。迷惑だから直してこい。

「相変わらず部屋汚すぎ、」

「うつさい。あんたが潔癖症なだけでしょうが」

「お前は尋常じゃなく埃溜めるだろうが」

「あ、勝手にさわらないでよっ」

テーブルの上の雑誌や紙束をさつと纏め、空いた場所に大量のお菓子と飲み物をコンビニ袋から出している。どんだけ人の家に長居する気なんだろうか。

早速ペットボトルの蓋を捻り、炭酸特有の空気の抜ける音が聞こえてくる。余程喉が渴いていたのか、ごくごくと音を出しながら上下する喉仏を呆れ混じりに見つめる。

思えばこの男が炭酸以外にジュースを飲むところを見たことが無い。歯が融けてしまえばいい、そして糖分によってそのひよろそうな体が太ってしまえ。若干体型の癖み込められた念に気づいたのか、此方に視線を向けたが一瞬だけだった。

「…やらんぞ」

「いるかつ！そんな飲みかけっ」

何を勘違いしたのか、ペットボトルを若干遠ざけた。頭いい癖して時々馬鹿な行動を執る男である。

次に手をつけたお菓子は、私の好きなクッキーだ。うちに来る時は大概、コイツは手土産に持ってくる。そしていつも、一枚目は無理やり私の口に挟み込んでくるので、ほぼ習慣化した様に目の前に出されたお菓子を齧る。餌付けとかではけしてない、筈だ。

「ん、」

「っーかさ、昨日から聞こうかと思ったんだけど、」

「おー？なに」

「会社辞めんの」

「は、」

いきなりの話題に、一瞬停止してしまう。

「なんでそんな話になんのよ」

「薄々そうなるかもな、とか思ってたしな。お前の母さんも心配してんぞ、きつと」

「……」

だから、コイツは家に入れなくなかったんだよ。

高卒の私が就職できるところなんて、あまり好条件を望めないのは当たり前だ。ましてや、私はけして頭が良いわけではない。したがって『いい会社』なんて、基準は様々だが、私には到底勤めることなどできない。別にこだわりも何もなかったが、入社した会社は、日々ストレスの溜まる場所だった。

同じ配属に女性社員なんて、私と課長の奥さんだけだった。しかも下っ端のお茶汲み係り。一番若い私が受けるストレスの種なんて、誰だって想像がつくだろう。

簡単な話、セクハラ、パワハラなどと言われるものだ。

視界で腕が動き、キャップを回す音がする。

「ま、良くもったほうだろ。2年なんてお前からすれば」
「……」

返す言葉も、気力も削がれ、斜め下をぼんやりと見つめるしかない。

なんだかんだいって、私より年上で付き合いの長いこの男は、ず

つと知っていたのだ。

実は、沈み込むと引きずってしまう性格とか。束になった雑誌の間の求人とか。好きなお菓子とか。机の上の履歴書とか。

「本当に、良くもったよ。正直焦ったけど、もうそんな心配ないし、な」

「人がこんなに苦しんでるのに、アンタは何へらへら嗤ってんの？
…さいてい」

鼻声が嫌だった。

「…、……」

「俺、海外にいる先輩の会社に呼ばれたんだ」

沈黙に、少し荒くなった呼吸が大きく聞こえる。

「だから、もう此処に来れない」

予想できたことだった。仲が良くとも大人になれば、勝手に接点が無くなってゆく。現にこの男とは、押しかけられた昨日が半年振りの再会だった。

ただ、きたない部屋も、このゆがんだ表情も気にせず曝すことの出来る相手はコイツしか居なかった。

「もう、帰って…、っ」

立ち上がりかけるが、腕を引き戻され再びソファに沈み込む。横から妙に苛立ちを込めた視線が刺さる気がした。

「大体な、生意気なんだよ。俺と一緒になって馬鹿やってた奴が社

会人面しやがつて」

「な、生意気なのはあんたのほうでしょっ、まだ学生で会社勤めもしたこと無いくせに！」

「一人で泣いてたくせに。ガキはそれらしく甘えとけっ」

「2歳しか違わないでしょうが、去年彼女に振られたくせにっ」

「おいっ、それは関係ないだろーが！」

重苦しく感じた空気が、子供のような喧嘩に吹き飛ばされた。

いつの間にか私は、泣き笑いの顔で目から汗が流れていたらしい。ため息を吐きながらガシガシとティッシュペーパーを取り、目元を拭い鼻までかまさせらせる。

「お前の面倒くらい、俺が見てやるよ」

「なんか格好つけたセリフ腹立つ」

「馬鹿言え、そこは惚れるとこだろ」

言葉よりも優しい仕草で髪を梳かれる。コイツは子供に好かれな
いが、世話を焼くのが趣味なのかと思うほどに面倒見がいい。その
影響だろうが、私は甘やかされるのに慣れ過ぎていた。もしくは、
私が頼るあまりにこんなギャップの激しい男になったのか。

「あ、ちょっとこっち向け」

「何、むっ、ちょ」

顎つかまれ上を向かせられる。そして口に突っ込まれ、液体が流
れ込んでくる。呑みきらなかった分が、首筋へ伝い落ちていった。

「は、ごほっがは、」

「よし、俺と一緒に来い。最初からそのつもりだったし、お前の分
の席も用意してもらってる」

「ん、はっ。なにを、勝手に、」

「今呑んだろ、俺の」

「それがなんだって、いうの」

「俺の好物を飲まれた精神的苦痛は半端じゃない。しかし元には戻らないし、買い直せばすむなんて俺の炭酸への愛は浅くない。よってお前は償わなければいけない。そのために仕事に就ける、よかつたな」

「え」

「ちなみに拒否権は皆無だ」

ぺらぺらと訳のわからないこと並べられる。聞き逃してはならないこともさりと合われた気もするが。無理やりだったと言えば、手が滑ったのだと返される。

「向こうは観光地だし、久しぶりに水着を着る機会があるぞ」

「はあ、そう」

「お前は名前がアレな癖して、カナヅチだもんなあ」

「余計なお世話だ」

あまりにも強引過ぎて、言葉も無い。しかし、そんなのも悪くないような気にさせられるから不思議だ。

「昔みたいに泳ぎ教えてやるよ、海」

余裕げに笑う男の手から、透明なボトルを奪い取り中身を呑む。しゅわしゅわ弾ける液体は、少し温くなっていた。

（後書き）

お題は、海 炭酸 転職でした。

処女作なので、どこかおかしい箇所にはご指摘いただけたら嬉しい
です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0979z/>

海 炭酸 転職

2011年12月3日19時56分発行